

北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス



第32号

平成29年1月1日発行

目 次

01. 名作紹介	加藤 大介	P. 02
02. マナドトゥア島滞在記－土地問題（その1）	中村高太郎	P. 15
03. バリ島生鮮食品の買い出し	江田 直美	P. 19
04. マッサージ	大貫 周明	P. 22
05. ペーパードライバー卒業	下村まゆみ	P. 25
06. 南洋真珠養殖 その4	今泉 宏	P. 27
07. 日本と日本人の七不思議	長崎 節夫	P. 31
08. 編集後記		P. 37

名作紹介

「南海の芝居に雪が降る」 加藤大介

50 年以上も前、顔のニキビに苦労していたころです。町の映画館の看板で「南の島に雪が降る」というのが掛かっていました。主演は加藤大介。主演の名前だけ憶えていて、共演者の名前は記憶にございません。この映画を観たかというと、観ていません。

題名と主演俳優の名前だけ憶えているのは、加藤大介が人気のある喜劇俳優であったことと、変わった題名のせいだと思います。

題名から勝手に想像したことは、昔、ニューギニアかどこかに行った兵隊さんたちが演芸会を催して、劇のなかで雪の降る場面があったのだらうということでした。

あれから実に 50 余年。私自身がニューギニアではないがそのとなりのセレベス島にいて、昭和 6 年、当地生まれのある日系人（大岩富さん）のお宅にお邪魔して昔話をうかがった折、帰り際に大岩さんが 1 冊の雑誌を差し出しました。「こんなものがあるけど読んでみますか」

帰りの車中で目次を確認してみると、真っ先に「名優・加藤大介の兵隊芝居 「南海の芝居に雪が降る」

反射的に 50 余年前の映画の看板を思い出しました。

掲載誌にある解説の後半部につづいて本文を一挙掲載です。

解説（前略）本稿は昭和 36 年に本誌掲載後、大幅に加筆・修正され「南の島に雪が降る」と改題し書籍化、激戦地の感動秘話としてベストセラーとなった（現在、ちくま文庫収録）。本稿発表後すぐに NHK がドラマ化、その後久松静児監督で映画化もされ、書籍発売にあわせ公開されている。原作の加藤大介を主演に、伴淳三郎、渥美清ほか喜劇俳優オールスターで作られた日本映画の傑作の一本であるが、映像ソフトの発売は残念ながら VHS のみで、ときおり名画座の上映や、衛星チャンネルでの放映がある。（後略）

（本文）

七千人の戦友

この正月、未知の中国人から年賀状を貰った。

台湾の人で、たまたま映画館の経営をひきうけたところ、上映した日本映画の中に私の顔を見つけ出し、それから、手を尽くして住所を調べて手紙をくれたのだという。

彼は戦時中、兵補として日本軍に強制的に志願させられ、私と同じニューギニアのマノクワリというところにいた。戦火の中心から置き去りを喰い、敵中に孤立していたジャングル中のちっぽけな部落である。

戦争らしい戦争もなく、細々と自給自活をする兵隊たちにとって、士気を昂揚する必要があった。師団は命令を下して劇場をつくり、私たち兵隊だけで本格的な興行を二年近くも続けた。戦時中の差別待遇がもとで、終戦後いろいろと事件の多かった兵補と日本兵の間からも、この芝居がなごませてくれた。手紙をくれた中国人は、当時の私をおぼえていたのである。

生きて故郷に帰る望みはなかった。それでいて戦意を維持しなくてはならない炎熱のジャングル。栄養失調とマラリアの猖獗するなかで、私たちは毎日芝居をした。戦友たちは涙をながして喜び、そうしている間もバタバタと死んでいった。

昨年、「筑豊の子供たち」を撮りに九州へ行ったときも、山奥の炭鉱から、はるばるたずねて来た人があった。その人も私たちの芝居をみてくれた人だった。

テレビの「スター千一夜」に出たら、プロデューサーがやはり、マノクワリ劇場の思い出を持つ人だった。

私は舞台に立っていたから記憶はない。だが、お客様は覚えていてくださる。つまり、私ごと陸軍軍曹加藤徳之助の戦友は、実に七千人もいるのである。

マノクワリ劇場の成立と歴史は、いささか滑稽ではあるが、どの演劇活動とくらべても恥しくない立派なものだ。そして、七千人の兵隊たちの忘れがたき記憶として、いまでも立派に生きているのである。

未知の中国人は、私にとって本当に懐かしい戦友の一人だったのだ。

三味線弾きと踊り手

昭和 18 年の 10 月、私は市川箆司の名で前進座にいて、道頓堀で芝居をしていた。そこへ赤紙がきた。

私は現役をすませており、衛生下士官だったから、直ちに兵站病院の編成に加わった。名簿をめくっていくと三味線弾きがいる。これは面白いなと思って、その兵隊のところに行ってみると、

「箆司さんですね」と、むこうから声をかけてきた。

「私は杵屋勝太郎の弟子で、杵屋和文次と申します。前進座の勧進帳などのときも大勢弾いている中にいました」

杵屋和文次の叶谷（かなや）利明は、私と同じような世界で暮していた人間だった。

いよいよ出征する前夜となった。お酒が出て、宿舎ではみんな騒いでいた。私が見回っていると、一つの班で踊りを踊っている男がいる。毛布を腰に巻いて、手拭いで鉢巻をし、飯盒の中蓋をチャッチャッチャッとたたきながら、スパニッシュダンスを踊っている。

「なんだお前は」

聞いてみると、宝塚でスペイン舞踊の振り付けをしていた前川五郎という兵隊だった。

妙なのがいろいろいると思って、病院長に、役者は私だけでなく三味線弾きも踊り手もいます、と話をした。院長は、いずれニューギニアから豪州までも進んで、現地で病院を開くときは、慰問ということも考えねばならぬ、という。

叶谷は家が大阪だったから、乗船の間際に帰宅させて、三味線を持ってこさせた。

私の第112兵站病院は、11月3日、日本をはなれた。船団の中で命令受領に行くと、テキパキした輸送副官がいた。この大尉は杉山誠さんといって、当時若手で売り出しの演芸評論家で、いまは俳優座の主事をやっている人であった。

話がはずんで杉山さんから、「この船はニューギニアにいくんだヨ」とはじめてきかされた。すでにガダルカナル、東部ニューギニアに敵の反攻が激しいときのことである。

「ヘエーッ」

といったまま、しばらくは声もでなかった。しかし杉山さんは、兵站地を開設したら演芸でもやるかなと笑っていた。

12月の8日、ニューギニアのマノクワリに上陸。12月といっても夏の盛りで、全くのジャングル地帯。えらいところに来てしまったとつくづく思わざるをえなかった。

置き去りにされた玉砕部隊

マノクワリは蘭領ニューギニアの首都だ。首都といっても、オランダ人の家は数軒あるきり。私たちの上陸する1か月ほど前に、海軍が敵前上陸したばかりだった。そのとき、報道班員として作家の村上元三さんがおられたらしいが、村上さんはすでに転進されていた。

その後、陸軍がどんどん上陸し、陸海合わせて4万人が集結する大兵站基地となってきた。病院はただちに開設され、東部ニューギニアの激戦地から回ってくる負傷兵の収容に、当分の間、寝る暇もない忙しさが続いた。

翌19年の春、ニューギニアの日本軍はひた押しに押されてきた。糧秣船はドカドカ沈められ、内地からの補給も途絶えがち。マノクワリの第二軍は、司令官豊島房太郎中将以下大部分が南のバボに転進することとなった。私たち兵站病院は残留の命令が出ていた。

戦後「ニューギニア死の行進」と伝えられた強行軍がこの転進であった。地図の上だけで参謀が斜めに線を引っ張り、三日か四日で行けるという計算がたてられた。

連日の空襲である。ビラもまかれた。

「いよいよ、お前たちのところに上陸する。無益な戦いは止めよ」

深堀少将の指揮する残留部隊は、いわば、主力の転進を援護する玉砕組の覚悟を決めた。

参謀たちは線だけ引っ張っておいて、自分たちは飛行機でバボへ飛んでいった。しかし、歩いて行った部隊の運命は悲惨だった。三日から四日の行程というので、食料の携行は1週間分。それが、一番早いので1か月半か2か月かかったのだ。兵站病院300余人のうち、100人がこの転進に加わり、私たちが手紙や遺品を託した彼らのうち、バボには10何人しか着いていない。

道なきジャングルに置き去りにされ、あるいは迷い、マラリアにおかされ、こうしてマノクワリ基地の5分の3の兵力は消えてしまった。

残された私たちは、こんなことは知らない。敵は、上陸は何日、というピラまで落とした。いまのうち食べるだけ食べてしまえと、缶詰をジャンジャン食い、明日なき命だとドンチャン騒ぎをやって、食べきれない缶詰は片っぱしから海の中に放り込んでしまった。

参謀たちは線だけ引っ張っておいて、自分たちは飛行機でバボへ飛んでいった。しかし、歩いて行った部隊の運命は悲惨だった。3日から4日の行程というので、食料の携行は1週間分。それが、一番早いので1か月半か、2か月かかったのだ。兵站病院300余人のうち、100人がこの転進に加わり、私たちが遺品や手紙を託した彼らのうち、バボには十何人しか着いていない。

道なきジャングルに置き去りにされ、あるいは迷い、マラリアにおかされ、こうしてマノクワリ基地の5分の3の兵力は消えてしまった。

残された私たちは、こんなことは知らない。敵は、上陸は何日というピラまで落した。いまのうち食べるだけ食べてしまえと、缶詰をジャンジャン食い、明日なき命だとドンチャン騒ぎをやって、食べきれない缶詰は片っぱしから海の中に叩き込んでしまった。

弾薬も十二分にあったから、空襲に対しては気前よく撃ち返した。ビアク島に敵が上陸する砲声が、マノクワリの私たちにも聞こえていた。ビアク、島守備隊は1か月ののち玉砕した。

明日くるか、明日くるか、生ツバを飲みこみながら待った。待てどくらせど、敵はちっとも来ない。深堀少将はえらいことだと気がついた。敵は弾薬の少なくなった袋のねずみの我が軍を取り残し、一つ飛ばして西のハルマヘラを攻撃していたのだった。

敵はこない。しかし、日本軍はいつまでもここで頑張らなくてはならない。食料は無理に食ったり捨てたりしたので、もう数少なかった。あわてて海の底をさがしても簡単に見つかるわけではない。

兵站部隊の将校で農学校出身の人が、たまたまイモの苗をもっていた。研究するつもりでフィリピンから持ってきたもので、自分の隊で植えていた。一年中暑く、雨も降る。イモはどんどん殖える。司令部はこれに目をつけ、各隊に苗を配って自給態勢をつくることになった。

海岸線は砲撃されるので病院は奥地のジャングルの中に移った。部隊は1日も2日もかかる距離に散らばり、空から発見されないように、木の隙間隙間にイモを植えた。

自給できる数量にイモ苗が殖えるのには半年はかかる。それまでは野生のタロイモや苔やトカゲで食いつながなくてはならない。

「イモ畑に入るものは日本人といえども銃殺する」という命令さえ出た。

マラリヤと栄養失調でどんどん死んでいったが、5月にはじまり10月までの半年間の死に方はことにひどかった。仲間が死ねと、皆で墓を掘る。掘っているうちに小休止があり、再び作業開始となると、休んだまま死んでいる兵隊がでた。穴を掘ってもらえる者はよかった。しまいには墓を掘る力もなくなってしまった。

11月、やっとイモふぁ殖え、食べる心配がなくなった。食は足りたが、依然として希望は何もなかった。

イモで焼酎を密造して飲む者もでた。何カ月にも一度か、パプア人の女をちらりと見る程度だったから女っ気はもちろん皆無。おなかがかくちくなって、気がすさんでいるから、喧嘩口論がたえなかった。

演芸分隊発足

杉山大尉あたりの建言で、演芸班をつくろうという話がでたのはこんなときであった。

いま岡山にいるが、渡辺参謀という人の前に私が出頭して、三味線弾きと踊り手がいることを報告すると、いっぺん深堀少将のまえでやってみたらということになった。

叶谷の三味線は、後生大事に持って歩いてはいたが、皮がジャングルの湿気ですっかり駄目になっていた。乾麺砲の容れものの薄いブリキを張ってみると、どうやら三味線に近い音が出た。

深堀少将以下10人ほどの幹部は、ジャングルの中で聞く三味線に泣いた。ある人は三味線をみただけで泣いていた。

叶谷は「勸進帳」を弾いて唄い、私は弁慶と富樫の問答を一人でやった。そのあと、前川は「越後獅子」を踊った。

これはイケる。各隊に触れを出し、人を集めることとなった。渡辺参謀と私が審査員となったが、素人芸がほとんどだった。

第一にきたのが博多仁輪加をやった。一人芝居だが大変にうまい。大柄な人で、停泊場司令部の篠原竜照という曹長だった。

門馬実という上等兵がきた。学生あがりでもーランジュールで脚本を書いていた男だった。次に来た中山一等兵も、関西の辻野良一という剣劇団の脚本家だった。

次は塩島上等兵、この男の家はカツラ屋さんだった。自分は勤め人だったが、カツラをつく

ることは知っているという。小原一等兵。美術学校を出て友禅の図案をしていた絵描きさんで、舞台装置をしますとやってきた。

衣装をこしらえなければいけない。ミシンを踏める者はいないかといったら、斎藤上等兵というのが出てきた。洋服屋だ。

日沼上等兵は針金細工が商売だが、虎造の浪花節が実に上手なのでこれもとった。

こんな顔ぶれが最初に集まった。これに私と叶谷と前川が加わった。これが、私を長とする演芸分隊であった。

11月3日、明治節。ジャングルの掘立小屋の将校集会所に板をならべ、前夜、斎藤上等兵がミシンをかけ、小原上等兵が絵を描いた幕を下げた。布はたくさんあった。パプア土人の宣撫工作用で、柄ものや無地もいっぱいあった。白粉もあった。不思議なことに口紅もあった。

カツラもつくった。叶谷は、親戚の、いま銀座の岡米というカツラ屋さんの心齋橋の支店に住んでいたのだから、作り方をしっていた。塩島もカツラ屋の育ちだ。二人が工夫して、乾麺の箱のブリキを切って土台をつくった。毛は麻をほぐして染めた。のちにはバナナの幹を泥に突っ込んで腐らせ、やわらかい繊維をとった。布はパラシュートの上質の絹を使い、縫い付けて結いあげた。丸髷ができる。高島田ができる。なんでもできた。

幕開きは叶谷の三味線で私が「越後獅子」をおどった。衣裳もちゃんとしらえた。次に黒い布の紋付と怪しげな袴を着て日沼が浪曲をうなり、篠原が博多仁輪加をやり、それから前川が躍った。

前川は女の着物を着て、カツラをかぶり、当時の流行歌「長崎物語」を踊ったのである。前の私たちのときはそれほど驚かなかった将校たちも、前川が女装して出てきたときにはあっと声を飲んだ。彼は女のようにやさしい顔つきだったから美しかった。

それまでは、戦時中にかかる演芸をやるなど何事か、という硬派もいたが、現実に見るにいたって「これは是非必要なものである。バラックではなく、堂々たる劇場を建設し、全部の兵隊たちにせめて月に一度ずつでもみせたらどうだ」と、はなしは大きくなった。

司令部は至急場所を探せと命令を下した。二つしかない自家発電機の1台も与えられた。演芸分隊は臨時ではなく、一個の独立部隊として一座の結成となったのである。私たちは直ちに劇場の建設にとりかかった。

ニセモノ現る

こういふときは軍隊は便利なもので、大工さん出身の兵隊が、豊富な木材をふんだんに使って劇場建設を開始した。

規模が大きくなってきた以上、さらに人員を集める必要があった。すると、エノケン一座の如月寛太が高射砲隊の上原部隊にいるという噂が伝わった。如月さんなら是が非でも欲しい役

者だ。

ところが、部隊を遠く点在させたので、上原部隊のいるアンダイ岬は幾日もかかるところに離れていた。司令部は如月寛太の青戸上等兵をよこせとかけ合ってくれた。

高射砲隊の指揮官は深堀少将と同期の人だったが2.26事件に連座し、満州にとばされていた万年大佐で、定期的な空襲の来る第一線の兵隊を芝居のために寄せせとは冗談いうな、とポンと断ってきた。

遂に、「青戸上等兵八何月何日付ヲ以テ、司令部ニ転属ヲ命ス」という大げさな命令まで出る始末となった。

ある日、私が普請場の材木のところに行くと、ひとりの兵隊がポツンとしゃがんでいて、私がいくとスッと立って敬礼をする。

「陸軍上等兵青戸隆二郎、昭和20年0月0日をもって軍司令部演芸班に転属を命ぜられましたッ」

こちらは如月さんに面識があるが、ぜんぜん人が違うのだ。エライことになったと思って分隊の責任者だった師団司令部の経理部長をやっていた村田大尉のところに行った。

この人は招集された会社の重役さんで、昔、市村座の菊吉に熱をあげたという芝居狂、司令官の信頼の厚い将校であった。

「えらいことになりました。あれは如月寛太ではありません。どうしましょう」

「いや、軍司令官閣下と高射砲隊指揮官とが、あれだけ喧嘩までしてとった男だ。命令の変更はできない。君、俺たちは生きて帰れるかどうかはわからないんだヨ。とすると、内地にいる長谷川一夫より、ここにいるニセモノの如月寛太のほうがずっといいのだ。君は役者だから知ってもいようが、みんなは知りもしないヨ」

そういえばそうだ。11月3日のときも、渡辺参謀は私たちを紹介するのに、

「今般、演芸分隊をつくった。この責任者の加藤軍曹は、市川筵司といって前進座にいた。前進座とはだ、有名な沢田正二郎のつくった・・・云々」

と言って、新国劇と前進座をごっちゃにしていた。市川筵司は知らなくても如月寛太の名はたいていの兵隊は知っている。顔はよく知らない。ニセモノとは知らずに、ホンモノの如月寛太を見てよかった、といって死んでいく者だっているかもしれない。置いておけ、ということになった。

あきれたことにこの青戸は、ごていねいにもエノケンさんや高峰秀子さんのサイン入りの日の丸ももっていたし、高峰さんからののがきまで持っている。そっと問いただしてみるとベソをかきながら、

「実は、如月の弟子です」

と白状した。彼は料理屋のせがれで、芝居好きなところからあちこちの劇団に首をつっこみ、手品の一座にもいたし、たしかに如月さんの弟子だったこともあるらしい。

部隊が満州にいたころ、たまたま余興でお婆さんの役をやり、それが、あとで上映された内地の映画の如月寛太のやったお婆さんにウリ二つだったことから、なんとなく「如月寛太がいるぞ」ということになってしまった。あいまいな返事をしているうちに引っ込みがつかなくなり、はがきや日の丸まで偽造して身分証明書としたのだそうだ。

こんなわけで、この二セモノも黙って如月寛太として通した。そのうち床屋さんも一座に加わった。

節劇の役者

マノクワリ劇場の建設はどんどんはかどった。電気で「マノクワリ劇場」と文字もついた。客席は板の間だが 傾斜がついていて200人収容。舞台は袖花道があり、間口4間、奥行3間。タッパも高かった。定式幕もあったし、緞帳もつくった。「x xさん江」なんて幟までぶっ立てた。もっともこれは空襲のとき目立つのですぐ取り払ってしまった。

この建設期間中、私たちは、昼は工事を指揮し、夜ともなると前川が女装し、三味線の叶谷に私がハコ屋となって将校た、将校たちのお座敷を廻っていた。なんおことはない、土建屋と芸者屋の二重勤務である。

劇場の落成間ぎわとなって、深堀少将は仙台の司令官を命ぜられた。司令部づきの兵隊として前川も内地に帰ることになった。

深堀少将と前川がイドレに転進していったあと、私たちは女形の員数を合わせるためヤサ男探しをはじめた。

兵站部隊にいた農業技手に、斎木という美男子がいた。色白だし、声も姿もよい。早速、後任の司令官鈴木大佐にお願いして、この将校待遇の軍属を女形に仕立てた。

衣裳係の斎藤もこざっぱりした男なので、これも女形。叶谷も粋だから、三味線と女形と二本立てにして、三人女形ができた。

まだ役者が足りない。そこに市川鯉之助という節劇の役者があらわれた。節劇とは、浪花節に合わせて芝居をする。歌舞伎だったら長唄が入るところを、デデン・・何が何して何とやら、と浪曲が入り、それに合わせて踊りのような恰好で、いわゆる壁塗りという手付きをするアレである。

この男も高射砲兵だった。柄はいいのだが、芝居をやらせてみると、なんとしても私たちの気持ちでいく芝居とちがう。ちょっと使えない。鯉之助にそういうと、

「自分は隊長殿から「お前が演芸分隊へ行くことは隊の誉れである。必ずともにわが隊の名誉を守り、立派にやってこい」といわれて出て参りました。いまさら戻るわけには参りません。芝居は直します。どうか使ってください」

「発声法から直さにはあかんぞ」

「直します」

というわけで置くことになった。

昭和 20 年 4 月 29 日。天長節がマノクワリ劇場の初日であった。将兵が客席に入るとパツと灯りがついた。各部隊ともローソクのあるところはよい方で、ヤシ油で灯をともしているか、夜はたいてい寝ていたものである。電気なんかしばらく見たことのない連中だ。電灯がパツとついただけで「ウワー」と喊声があがった。

そのときの出し物は、はじめが日沼の浪曲。次に、少し前に参加していた今川永喜一等兵が音楽をやった。今川は及川一郎という古いコロムビアの歌手で、歌も作曲もするし、楽器もいじれた。楽器は全滅した軍楽隊のがソックリあったし、オランダ人の家からピアノとヴァイオリンを持ってきていた。

いま、代々木駅の前でピアノ屋をやっている原という調律師が病院の内科の責任者にいて、この原曹長が芝居のときだけ出張してピアノを弾き、ヴァイオリンも素人だが相当うまい人が応援に出てくれた。

この音楽のあと、青戸が手品をやり、最後に、慰問品の中から見つけた日本戯曲全集「長谷川伸扁」をもとに「険の母」をやったのである。

私が番場の忠太郎、叶谷が娘、半次に鯉之助を使い、おっかさんには塩島、半次の妹が農業技手の斎木、水熊のお袋は篠原曹長が買ってでるという配役。

序幕の半次の家、水熊の表、水熊の座敷、土手のところと、こうして色物ではじまり芝居で終わる約 3 時間、兵隊たちは大変な喜び方であった。

雪と兵隊

この日からずっと、翌 21 年 5 月までの一年余り、なんとマノクワリ劇場は一日も休まず幕をあけたのである。

各部隊に命令がだされた。「何月何日ヨリ観劇を行フ 狂言八何々」と発表される。200 人しか収容できないから割り当てをきめ。1 か月余りでひと通り見終わると狂言を変えた。

主な狂言は次のようなものだった。

長谷川伸作「険の母」「関の弥太っぺ」「一本刀土俵入り」。岡本綺堂作「権三と助十」「相馬の金さん」。川口松太郎作「号外五円五十銭」。中野実作「二等寝台」。行友李風作「国定忠治」。その他「父帰る」「浅草の日」「暖流」など。

装置は手間ひまを惜しまなかったから立派なものだった。「一本刀」では二階までちゃんと作ったし、「国定忠治」ではジャングルの生の木を毎日切ってはところ狭しとならべた。しかし、わけても思い出の深いのは「関の弥太っぺ」であった。

鈴木大佐のあとの馬場少将のころだったと思うが、次の狂言を司令官に申告にいくと、「こんどの狂言に少し希望があるのだが」

といわれた。

「関の弥太っぺ」という芝居は見たことがある。あの中で雪を降らせんかね」

私は病院にいたころ、東北の兵隊が息をひきとるとき、枕もとで手を握っている私に「雪が見たい」といって死んだことを思い出した。もっともなことだと思った。

長谷川先生の本では、弥太っぺが何年かのちに娘に会いにきたときに雨が降る。そこを雪にかえた。

戸をガラッと開けると、サッと雪が舞い込みこんでくる。その戸を閉めさせ、次の庭でのチャンバラを雪の場面にしたのである。

地面の雪はパラシュートをふんだんに使った。飛行機なんか1機もないから、いくらでも使ってよかった。贅沢に敷きつめて、歩くとスネまで入り、降り積もった雪の感じであった。木々の雪は病院の脱脂綿をわけてもらい、三角の紙の雪を上方からパッとやる手はずであった。

幕が開いた瞬間、それまでザワついていた客席が、本当に水を打ったようにシーンとしてしまった。「静かだな」と舞台から見ると、二百人をこえる兵隊たちが、一人の例外もなく両手で顔を抑えて泣いていた。国武部隊という東北の部隊だったのだ。チャンバラをする私の頬にも、あとからあとからと涙が新しい筋をつくった。

帰国してから、この話を長谷川先生にお話しすると「役者は人を楽しますものなのだヨ」と心から喜んで下さった。

「浅草の灯」の唄

現代劇もやろうじゃないか、という話ももちあがった。「浅草の灯」を門馬が覚えていた。私が山上七郎をやった。

序幕、浅草公園の場の幕が開くと、前に藤棚があり、奥にひょうたん池、その向こうにミニチュアの映画館が並んで、上に12階が突出し、窓の一つ一つに電気が入り、灯りが池の水にチラチラとうつる、という凝った舞台装置である。

これは電気屋の兵隊たちにとっては朝飯前のしごとであった。バックのホリゾントの星がキラリキラリと輝き出すと、見物の将兵は、思わずホーッとため息をついた。いつの日、俺たちはこの灯をみることができよう、と考えていたに違いない。

どこかの隊の将校が主題歌を思い出して届けてくれた。及川一郎が作曲して歌った。

夜のとばりに流れゆく

恋の浅草人の波

意地と情けに身を捨てて

男山上なにを泣く

この唄はジャングル中に流行した。戦後めぐりあった戦友で、私の顔を見るなりこの唄を歌った人は2、3人にはとどまらない。

だんだんと仕掛けが本格的となり、ついに回り舞台にしようとしたとき、戦争は終わった。やがてイギリス軍が現れ、「迎えの船が来るまで、そのままいろ」ということになり、旧オランダ人住宅との間に一線を描き、海岸から下がったところで相変わらずの自給自足を続けることとなった。

イギリス軍は芝居があると聞いて、俺たちにも見せろとやってきた。

旧劇をへらし、タップのできる水兵を特別参加させてサービスすると、敵も娯楽に飢えていたから大いに喜んだ。このまま継続してよろしい。ピアノもオランダ人に還さなくてもよい。その代り、我々にも月に一度は見せろといわれた。

彼らも何カ月も女を見ていない。斎木、叶谷などの女形のモテ方は大変なもので、どこから聞き伝えてくるのか、軍艦や潜水艦が観劇に入港し、煙草や携帯口糧の付け届けが山をなした。

それまでは屋根も偽装していたし、空襲を警戒してマチネエばかりやっていたこともあったが、もう、大っぴらにジャングルを切り開き、200人を300人に、400人と拡張し、補強し、電気も充分に使えるようになった。

村田大尉は青戸を呼んで、

「俺たちはいつか日本に帰れる。お前も、もうニセモノはやめて本名にかえれ」

といわれた。青戸は以後、如月寛太を名乗らず、青戸の名で芝居をつづけた。

女形のフンドシ姿は困る

一方、食料の自給のため、昼はイモ畑の農耕労働がつづいた。もう戦争はない。死ぬのではなく帰国船を待つだけだから、演芸がますます将兵の楽しみとなっていた。

男だけの世界である。まして暑い土地だ。畑仕事はフンドシ一本で働いていた。ときにそれさえも外して耕していた。

これが師団司令部の問題となった。我々の唯一の慰めであるスタアの女形たちが、かくもアラレもない姿で泥にまみれているのを目撃することは、まことに幻滅の極みである。彼らの労働を免除し、代わりにイモの入場料をとれば、芝居も充実するだろうし夢もやぶれないではないか。

といったわけで、我々は労働をやめ、芝居のテンポを上げることとなった。

アンダイという離れたところにいる部隊は、川を泳いで渡り、何日か野宿して芝居をみにくる。彼らは泳ぐのでイモを持ってこられなかった。そして芝居をみたあと私たちと一晩語り明かし、朝になるとイモを耕してから「さよなら」と言って帰っていった。

二カ月くらいしてからまた彼らが来る。

「この間の何某はどうしている」

「死にました」

イモだけの生活では抵抗力が少なくなっているのだろう。このころになってもポツリポツリと死んでいたのである。

「あの男はもう死にました。でも、あいつは死ぬまで、この間の芝居は面白かった、とっていました」

私は胸を衝かれるような思いだった。翌日、彼らがまたジャングルに消えていくとき、このうちの何人かが、二カ月先にくるときは死んでいるのだろうという気持ちで見送った。

私はこのように喜ばれる役者稼業を、生涯つづけようと決めた。いまでも演出にも脚色にも興味はない。私は死ぬまで役者でとおすつもりだ。

現代劇をやるようになって、洋服の必要ができた。はじめは海軍の軍属のを貰っていたが、足りない。斎藤は女ものの仕立てはできなかつた。すると通信隊の隊長さんで細野久という大尉がいた。いま、銀座でモレナという洋裁店をやっている人である。この細野大尉が特別の出張命令でミシンを踏んでくれた。

総監督杉山誠のもとで、一座の内容は充実した。市川鯉之助はすっかりリアルな芝居に変わっていい二枚目となった。篠原曹長は敵役。私が立て役。女形が斎木、斎藤、叶谷と役どころも決まった。

現代劇に坊主アタマでは具合が悪い。師団司令部の許可で分隊だけ髪をのぼしてしまった。ブリキの三味線はパラシュートの絹に張り替えられ、音色もよくなった。パプア土人にもなつかれ、一線をこえて海岸にでて、魚を釣ってくることも私たちは自由だった。

21年の5月、「二等寝台車」をやって、次の「暖流」を始めるまえに、司令部から「いよいよ船が入る。明日海岸線に集結するので演芸は今日をもって終わりとせよ」と連絡があった。

幕間に私が舞台にでて報告した。一瞬シーンとして、しばらくすると、ワッと歓声とも泣き声ともつかぬわめきが起った。私たちは死んだ戦友のことや家族のことを考えながら「蛍の光」を合唱した。

乗船したのは七千人であった。四万の部隊が七千人になってしまったのだ。細野大尉は乗船の間際まで、オランダ婦人のためにミシンを踏みつけていた。

その後の一座の人々

私は復員すると前進座を辞め、兄の沢村国太郎といっしょに京都で芝居をやっていた。ある日、楽屋にエノケン一座の中村是好さんと如月寛太さんがつれだって現れ、

「班長殿、元気でありますか」

如月さんがシャチホコばって挨拶をするではないか。これにはびっくりした。如月さんは兵隊に行かなかったのに、方々で未知の戦友にたずねてこられ、二セモノのいきさつを知ったのだそう。青戸はその後全く消息をきかない。器用な男だったが、いったい何をしているのだら

うか。

九州に行ったとき、篠原さんを訪ねてみた。篠原曹長は福岡郊外の法照寺という立派なお寺の僧正であった。堂々たる名僧智識だった。こんな人だからこそ、毎日毎日、出て行ってはバツバツと斬られる敵役に徹底できたのかもしれない。

「月に一度の法話のあとで、芝居を見せましたけど、相手が昔みたいに乗ってこないのももう止めましたわ」

とカラカラ笑っていた。

鯉之助はどうしているだろう。山口県の宿屋で聞いてみると、

「いまどこにいますかねえ、もとはいい役者でしたが、かわいそうに兵隊にとられてから芝居が荒れてまずくなりましてね、なんでも、役者をやめて炭鉱へいったときいてますよ」

と女将さんが話してくれた。発声法から芝居を直したことが彼の人生をゆがめたのかもしれないなかつた、私は心が重くなった。

叶谷は三味線をやめ、岡米にもどってカツラ屋を本職にしてしまった。

塩島は家が焼けて、細君の疎開先の信州へ帰り、そこの芝居で一等をとって人気者となり、住み着いて果樹園をやっている。

小原は衣裳の图案家にもどった。斎藤は洋服屋、及川一郎の今川は声がつぶれて勤め人となった。斎木は復員後も芝居をやりたいと私のところにきた。一度芝居の空気を吸って、あの世界が忘れられなくなったようだった。しかし、所詮内地で通用する芸ではない。演芸関係の雑誌をやっていたらしいが、つぶれて、その後消息がない。

村田さんは一度銀座に店を出したが体をこわし、宇都宮でいま社長さんとなっている。

七千人は全国の家々へ帰っていった。

「大番」で四国へいけば、宇和島の先の島から戦友がたずねてきてくれた。映画をみて北海道からも手紙がきた。仙台の先の郵便局長さんは国武部隊の人であった。

「帰ってからの芝居はみなつまりません。ニューギニアのような立派な演劇は、その後みておりません」

と云ってくださった。

私はいまも思う。人様を楽ませる役者であることは本当に幸いであり、誇りとすべきことなのだ。

七千人の戦友たちのためにも、これからますますいい芝居をしよう。それがニューギニアで死んでいった人々に対する義務だと思っている。

(「文芸春秋」昭和36年3月号)

マナドトゥア島滞在記 土地問題（1）

中村 高太郎

皆様、こんにちは、中村です。

現在は、マナドトゥア島での病気以来、大事を取ってマナドの方で暮らすこととなり、マナドトゥア島へは、様子見で定期的に訪問するという状況です。それで、だいぶ落ち着いてきましたので、マナドトゥア島で起きた土地問題について貴重な体験を何回かに分けてつづつてみたいと思います。

（マナドトゥア島滞在記と書きながら正味の滞在は、1ヶ月ですが、そこはご了解ください。）

さて、今回のマナドトゥア島でのメインの出来事、それは、土地問題・・・土地問題は日本でも厄介な問題だなあ・・・と皆さん思われると思います、、、そうなんです。かなり厄介な問題でした。しかも日本とは違った意味での、常識では考えられない人たちがいるのも事実です。

分かりやすいように、まず、問題となった場所の紹介です。

舞台の場所は、インドネシア共和国 北スラウェシ州 のマナド市の沖合にある、マナドトゥア島。マナドトゥア島は、ダイビングで有名なブナケン島の隣の島ですが、ブナケン島より距離があり、交通の利便が悪いためか、観光は全くなく（過去リゾートができたという話はあったが、廃業）おもに住民が、生活している島です。人口は数千人程度かと思います。ちなみにインドネシアの有権者名簿によると、マナドトゥア島に籍を置く有権者は、1912人（2015年）となっています。漁業とココナッツ（コブラ）が主な産業ですが、ここ何年か雨が極端に降らない状況が続いており、ココナッツも以前は青々としていましたが、4月に上陸したときは黄色くなっていました。実際ココナッツもこぶし大ぐらいの大きさしかなく、雨が少ない影響が出ています。そのような状況ですから、2016年4月の時点では島民は漁業に力が入っているようです。

さて、マナドトゥア島の北側に妻の実家（土地家とも妻の所有で、妻に譲るといふ祖父の「遺言」を祖母たちが「証言」の公証書あり。）があり、その土地と建物をめぐっての（大変ばかばかしい）争いとなります。



マナドトゥア島 Pangaringan 村の棧橋



妻の実家（一番奥の一段高い位置にある家）

※写真は 2008 年当時のもの現在は改築中

続いて登場人物紹介です。現時点で相手から念書を取り、今後（嘘の）訴えなどを行わないと確約させて収束となっていますが、今後の訴訟など万一の事態を考慮し、念のため、本名は伏せておきます。

- ・私、妻、おじさん「A」（妻の母親の兄弟）、隣人、などなど
- ・問題のおじさん「X」とその家族、Xの奥さんの「Y」、またYの連れ子の「Z」

それで、私の方は、2月末に日本を出発し、3月からインドネシアのホテルで入管の手続きやマナドトゥア島に住むための準備をして、4月よりマナドトゥア島での生活が始まりました。

しかし不穏な空気が3月の中旬ごろからあり。それは、妻のおじさんであるXが、妻の土地と家を自分のものだと言ったのでした。さらに、パラ（町内会長のような役職で民間人）は、真に受けたのか知りませんが、当初こちらに問題があるようなそぶりで高圧的な感じでした。（もっともパラはマナドトゥア島の女性と結婚により数年前マナドトゥア島へ渡ってきた人で、昔からの土地勘があるわけではなく、私たちも、6年以上マナドトゥア島を留守にしていたので、ある時ふっと湧いて出たような存在に、そのような態度に出るのは、もっともかもしれません。）

そこで事前に、マナド市内にいる、マナドトゥアの妻の地区を担当のルラ（地区長・村長みたいな役職の公務員）のもとを訪れ、こちらの前述の書類（遺言関係など）のコピーを確認してもらいました。当然、その書類で問題ない。こちらに土地の所有権があるというものでした。

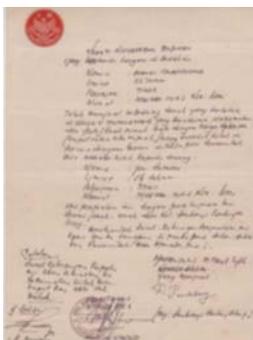
ここで、インドネシアでは土地の所有権などは、どのような感じになっているでしょう・・・

インドネシアでも日本と同じように土地の所有権の証明書はあるようです。ただし、実際にそういった証明書を取得しているという人は田舎では多くなく、また、多くが家族の土地（お祖父さん時代に畑などとして開墾して所有を表明したとか）で、元の所有者の子供や孫などに遺産相続のような形で分割されているのが実情です。元の所有者の大きな土地の登記はあって

も、子供や孫に分割したときの登記はないなどもよくあるようです。こういった場合、その土地がだれのものであるかは、家族・親類内での口約束であったり、ご近所や、パラのような立場の人や、ルラがそれを、把握しているといった状況のようです。そのような状況が一般的であるので、ひとたび問題が起こると、パラやルラは記憶を頼ったり、近隣住民に聞き取りを行う必要が出てくるのです。またそういう土地を親類以外の物へ売買するときは、親類全ての同意書が必要になる事もあるようです。買う方もそれを、きちんと確認しないと、後でトラブルに巻き込まれることもあるようです。なんだか大変ですね。

つまり、土地を購入したものの売り主の親類と名乗る人が現れ、自分もこの土地の一部の権利をもっているが、売るつもりはない・・・などと言い出し、工事などを妨害するとか嫌がらせをするとか言った場合もあるようなのです。この場合、売り主が本当に土地の所有者なのか（家族親類には無断で、お祖父さんやおばあさんの登記簿を勝手に使ったなどあれば無効になる可能性もあるだろうし）、正しい方法で土地の売買の処理が行われたかなど色々証明できなければ困ったこととなります。もしかすると、自分のこの土地の一部の権利を持っていると言い出した人が、本当に権利を持っていることもあり油断できません。このような場合は、売買が無効になってしまいますし、売り主は、お金を返す必要がありますが、お金が戻ってくるかは、期待はほぼできないと思います。

ですから、購入前に登記簿などを確認し本当の書類であるか確認したりすることはもちろんですが、土地の税金の納税記録の確認や近隣住民に聞きまわったり、売り主の親類と土地の関係や、関係があるとしても同意している（書面などで一筆あるかも）か、などをチェックすることも重要になるわけです。また、土地売買の処理も、役所を通して書面や記録を付けることも必要でしょう、そのようなことをすれば当然、土地の測量から始まり、公証人や役場の人やいろいろな関わってきますから土地代の他にも出費が多くなります。その代り、後で何か言ってくるても少なくとも書類上（法律上）は、正しい土地の所有者という事になります。



土地売買契約書



土地測量図



土地譲渡に関する供述書

※画像は、書類の性質上、拡大しても判別できないよう、細部は、ぼかし処理をしております。ご了承ください。

今回マナドトゥア島での一件は、パラヤルラは地元で詳しい人たちではありませんでした。ルラについては、入管への届出の際に住所の証明などが必要で、我々も、書類作成で何度か会っていました。こちらでは、ことあるごとに書類作成の折に謝礼（賄賂、チップ感覚？）を渡すのが普通で、最近では、要求こそはなくなりました（公務員に対して、罰則や通達があつていようです）が、渡さないと、なにかと仕事が遅いなど、で、渡すと早いという事で、改善はされてきている感じですが、まだまだというのが実情、しかし、このルラに至っては、仕事も早く、妻が、書類作成後に、こちらの風習？に則って、謝礼として小さく丸めた紙幣を握手に紛れて渡そうとすると、ポロリと下に落ちるではありませんか、最初は手が滑ったなどの、トラブルかと思ってもう一度チャレンジ、するとまたポロリと捨てられる。

するとルラは、この書類はお金は必要ないから、要らない。謝礼も必要ない！と言うではありませんか！！日本では、至極当たり前の事なのですが、これは一大センセーションでした。

さて、話を戻しますが、こちらの書類は、ほとんどすべて準備されており、覆すのは難しいだろうとの状況。しかし、油断はできません、パラヤルラも裏で、つながっている可能性もあります。見た感じ前述のように誠実そうではありますが、ここはインドネシア、相手には失礼かもしれませんが、あらゆる事態を想定しなければなりません。いま実家に居候している、妻の直系の兄夫婦も含め、100%信用でき安心できるという保証はありません。日本人会の方々からも色々アドバイスをいただきましたが、総合すると、最終的に自分と妻以外は信用できないというものでした。（ここで妻すらも信用できなければ、もうダメダメですから・・・）

そして、4/1 にマナドトゥア島に上陸（長期居住の目的で・・・）すると、翌日 4/2 には、さっそく、問題の X がすごい剣幕で押しかけてきて、意味不明のことを言いまくるではありませんか・・・どうも妻が祖父の家の権利書を盗んだとか・・・そういったことを言います。

そして、その夜、X はパラの家に押しかけて「妻が盗みをした」と（事実無根の）通報したようです。

さらに、翌日の、4/3 にパラが自宅にやってきて、かくかくしかじか・・・で、こちら書類のコピーなどを見せたり、ルラへの相談など話すと、どうやら、ようやく、どちらに分があるか分かったようです。それまでの高圧的な態度も若干、和らいだように感じました。土曜日の夜中に X がパラの家に押しかけてくるなどは、さすがに引いたような感じもありました。

そして、4/4 に双方の事情聴取を行うとなりました。

・・・さてさて、これからどうなるでしょう・・・（次回へ続く）

※3月中は、ルラだけでなく、日本人会の皆様にも、相談させていただき具体的かつ貴重な意見をいただきました。日本人会の皆様へは、この場を借りてお礼を申し上げます。

バリ島 生鮮食品の買い出し

江田 直美

日本人会の皆さま、こんにちは。
明けましておめでとうございます。

今年も皆さまとご家族にとって、良い1年になりますよう、心よりお祈り申し上げます！

今回はバリ島での、生鮮食品の買い出しについて書いてみたいと思います。

その前に、

トモホンでは、バスターミナルが併設されている大きな市場で、生鮮食品を購入していました。
野菜、肉、魚、全て新鮮なものが手に入りました。

野菜は主に Rurukan から、魚は Manado や Bitung から、新鮮なものが早朝に運ばれて来ます。私たちは、Tude と呼ばれる鰻を好んで、購入していました。素揚げ、アジフライ、Ikan Tude woku 等、1週間の殆どが魚料理でした。



Cucur が美味しい。(7個 RP10.000)

トモホン市場は現在、建物の老朽化に伴い、リノベーションが進められているそうです。
それでは、本題のバリ島での買い出しについてです。

私たちは、近所の市場と地元の「tiara dewata」というスーパーマーケットを利用しています。

野菜、果物、肉類はこの2ヶ所で、ある程度新鮮なものが、購入出来ます。

市場は地域にある小さな市場なので、観光客の姿はありません。

値段交渉は一応はしますが、得意ではありません。普段購入している価格より高ければ、

「いつもはRp〇〇くらいだよなー」とやんわりと言って、安くなるか聞くようにしています。

しかし、食べたいと思えるような新鮮な魚が、市場でもスーパーマーケットでも、なかなか手に入りません。

我が家では、以前に比べて、魚が食卓にあがる回数が減ってしまいました。

市場の魚屋さんで、一番新鮮なのは、Lele(ナマズ)です。生きたまま、売られているのですから、当然ですね。

でも、鯰を捌く、勇気も腕もないので、買えません。

何より、下処理の時間と手間を考えると、外で食べるのが一番です。

バリ島で初めて、Lele goreng を食べましたが、美味しいです。

臭みもなく、淡泊な味です。

バリ島で新鮮な魚が食べたい時は、昼食を兼ねて、ジンバランの Pasar ikan Kedonganan Jimbaran へ買い出しに行きます。

kakap merah や鱈、(Rp40-60.000/kg)海老(Rp100-200.000/kg)を購入することが多いです。それぞれ1キロくらいずつ購入して、その中のいくつかを昼食用に近くのワルンに持ち込みます。

焼き代 Rp20.000/kg くらいで、美味しいイカンバカールをお腹いっぱい楽しめます。

ジンバランのイカンバカールは、ビーチ沿いのレストランが有名ですね。ここで夕陽を見ながらの食事は最高です。

でも、普段は格安で食べられる市場周辺のワルンでも、十分満足出来ます。

最近、ワルンでイカンバカールを楽しむ観光客の姿も、見かけるようになりました。

天候が良ければ、青い海と色とりどりの漁船が綺麗に見えます。



Kelapa muda Rp10.000。いつも甘くて美味しい。

魚の購入に関しては、不便を感じることも多いですが、自分で作るより安く手軽に食べられるレストランやワルンもあるので、上手く活用しています。

地元のスーパーマーケットには、トモホンでは、なかなか手に入らなかった、、、というか、自分で家庭菜園で作らないと食べられなかった枝豆やオクラ、ルッコラ、バジル、サラダ菜なども、手に入ります。

住む地域や行動範囲諸々で、購入出来る食材も若干、変わってくると思います。今ある環境で工夫しながら、エンゲル係数を抑えつつ、、、これからも健康な食生活を送れるようにしたいと、改めて思っています。

マッサージ

大貫 周明

仕事でいろいろな国をまわっていますが、疲れを癒すにはマッサージですね。
シンガポール、フィリピン、タイ、中国、インドネシアなどなど
資本がなくても手軽に始められるからか、マッサージ屋がどんどん増えております。
今日は、私のおすすめマッサージを紹介します。

1. タイ古式マッサージ

何と言っても、タイ古式マッサージが一番ですね。痛くなく気持ちいい。
2時間コースで大体400バーツ（約1,200円）と安いのもいいですね。
逆に1時間だと300バーツと割高。だから2時間するしかないでしょ。
タイのどこの街にいても、マッサージ屋を探すのには苦労しません。
数が多いからか、基本的に施術者のレベルが高いのも特徴。
揉むだけでなく、体の筋を伸ばしたり、内腿の大動脈を抑えて血流を1分程
止めて一気に流すという、あのドクドクする感覚が好きです。（リンパ？）
あまりに気持ちがいいので、大抵は施術中に寝てしまいます。
ストレッチ運動したようなものなので、マッサージのあとも爆睡です。

2. タイの木槌マッサージ（トークセン）

木槌と木杭を使ってトントンとたたくタイ北部の伝統療法です。
これを体験出来る店は僕はバンコクでも1箇所しか知りません。
施術に使用する木槌と杭は、雷が落ちた木からのみ作られるそうです。
科学的な根拠はないものの、そのパワーを注入される感じがします。
雷パワーはツボから振動と一緒に体の奥に入っていくんだそうです。
背中をトントンされると背骨の奥まで響いて大変に気持ちいいのですが、
手足の指などをトントンされると拷問にあっていような痛さで辛い。
時々、店内のあちらこちらから、うっ、とか、イテッとか聞こえてきます。
頭部をトントンされると頭痛みたいな感じで辛い感じ。
でも、これが効果てきめん。2～3日は体が軽いです。風邪も治る。
この技術をもっている施術者が少ないからか価格は高め、古式の2～3倍。

昨年、日本のテレビで紹介された影響からか、お客は日本人ばかり。
最近は予約しないと待たされる事が多いです。

3. 中国の按摩&針灸

中国では盲目の方が従事している事が多く、彼らはツボを的確におさえているので非常にうまい。言葉が通じないので、何を言われているのか不明であるが、たぶん、あ〜、あんた完全に肝臓わるいよ、とか言ってますね。絶対。
針も灸も調子悪い時にやってもらおうと、やっぱ中国、ってくらい効きます。

4. カップリング (吸玉)

中国やシンガポールの街中のマッサージ屋でよく見かけます。
ガラスの半球の中を真空にして背中にくっつけて 15 分程そのままにする施術。
最初に受けたのは 3 年前。店のおやじが執拗に勧めてくるので恐る恐る試してみた。吸玉は一度に 10 個位を背中にくっつけます。これが痛い。
痛さに耐えていると、後半はなぜか気持ちよく感じてきます。
背中に真っ赤な丸い跡が 1 週間位残りますので注意。模様がちょっとキモい。
家に帰ったら家族から変な病気を持って帰ってきたと騒がれました。
不健康な人ほど跡が濃くて消えにくいとか、色が紫色の時はあんた体悪いよ、と言われます。
悪い部位は特に色が濃いらしい。(科学的根拠なし)
あと、下手くそな人にあたってしまうと、真空にするときの火が熱いのなんの。
やるときは上手そうな専門店どうぞ。

5. カイロプラクティック

個人的には好きです。バキバキ・ボキボキやってもらって、関節技を掛けてもらうようなあの感覚。どんだけ体から音を出すんですか、ってくらいやってもらって超スッキリ&グツタリ。でも価格が高いので頻繁には出来ませんね。
あ〜行きたい。

6. トルコのマッサージ

トルコには共同浴場があって、その一角にマッサージを受けれるスパースが必ずあります。
大男が韓国のあかすりのように全身をタオルでゴシゴシ洗ってくれた後にもみ始めます。高速で太鼓を叩くかのようにペシペシされますが、これが気持ちいい。寝そべっている石の台も下にお湯が流れているのか、ホカホカします。施術時間は短いのですが爆睡必至です。

7. フィリピンのマッサージ

とにかく安い。ゼネサンで1時間 300円位だった。しかも普通に上手。スウェーデンマッサージと言っていたが、もむ、叩くで、特徴はない。

8. 台湾の整体

いつも行く店が悪いのか、台湾式のマッサージはとにかく力が強め。翌日の揉み返し必至である。台湾は足裏マッサージも棒でグリグリで痛い。台湾のおやじは客が痛がるのを見て喜んでるフシがある。が、ひどい2日酔いの時など、この痛いのが良い具合に。イタキモ最高。1時間 1,000元位。

補足説明：ちょっと弱くしてね、とか言えばちょうどよくしてもらえます。

が、私のマッサージは真剣勝負ゆえ、力加減を緩めてもらうのはポリシーに反するので、あえてどこでも我慢して受けるのです。

番外編

タイの伝統 玉もみマッサージ (ジャップカサイ)

簡単に言うと睾丸マッサージですね。

玉を揉むというよりは、袋を伸ばしたり引っ張ったり、付け根を押ししたり、陰嚢周囲のマッサージ。タマタマを普段はあり得ないあらゆる角度へ引っ張られると、精管が伸びる感じで Good。痛くはない。むしろ気持ちいい。

(下手な人にされると相当痛いのもかもしれない)

ちゃんとした真面目なタイの伝統的なマッサージで、泌尿器や男性機能の回復に効果がある。

価格は通常のマッサージの2倍とちょっと高いですが行く価値はありますよ。

バンコクではこのマッサージとエロを融合させたコースが主流で、タイ熟女が巧みな指技で最後までスッキリさせてくれる。

おすすめ出来ないマッサージ

インドネシアの SHIATSU(指圧)

正確には指圧でないし、ツボは関係ない。ひたすら足で踏まれるだけで痛い。

巨漢にあたってしまうと地獄をみる。逆に腰痛になるんじゃないか？

以上

ペーパードライバー卒業

下村 まゆみ

運転免許証を取得後数えるほどしか運転経験がなく、無駄にゴールドな免許を25年以上も所持し続けていた私が、一念発起しペーパードライバー卒業を目指すことになりました。

はじめは自動車教習所のペーパードライバーコースに通うつもりでいたところ、ネットでペーパードライバー専門の出張型教習を発見。後者の方が良さそうで、1日2時間×5日間コースで何とかなりそうかも?!なんて話しを弟にしたら、「俺が教えるよ」という展開に。でも、よくよく考えると、弟から習う場合は自家用車(補助ブレーキなし)で練習するわけで、弟にも家庭があるわけで、ここはやはり専門家をお願いするのが良いだろうという結論に達しました。

出張型教習は自宅や職場など指定した場所まで迎えに来てくれます。もちろん教習車は補助ブレーキ付き。教えてくださるのは、指導員の資格を持つ元自動車教習所の教官です。

教習初日、ドキドキしながら運転席に座った私に教官は、ハンドル、ペダル、ギア、ミラー、ライトなど運転席周りの機能をさらっと説明し、そして言いました。「では行きましょう。ブレーキから足を離すと進みますから」と。私は心の中で「えっ、いきなりそう来ますか?」と思いました。でもここでジタバタするわけには行きません。

私がアクセルを踏んで車を進めている。前後左右を車に囲まれ、その流れのなかで私もハンドルを握っている。それはとても不思議な感覚で、怖さよりも、「これって本当に現実の出来事ですか?」「私がこんなことしちゃって本当に大丈夫ですか?」という気持ちの方が強かったです。

住宅地から交通量の多い道に出た車は、幹線道路へと進みました。幹線道路をしばらく走ると今度はどんどん辺鄙な場所へと向かい、遂には山の麓に到着。そうです、教習初日のメインは山道走行で、カーブだらけ、アップダウンだらけの山道を、対向車線にはみ出しまくりながら、ただひたすらもう飽々するほど走りました。こうした山道走行はペーパードライバーコースの定番だそうで、いきなり峠道(かつては全国から走り屋が馳せ参じた峠道)へ連れていか

れた人もいます。それに比べれば私の方は子供騙しのような山道。対向車も後続車も少なくても本当に良かったです。

山道走行は初回のみ。2回目の教習では市街地や幹線道路で右折、左折、車線変更、合流などを繰り返しながら走り、3回目からは横列駐車の実習も加わりました。

2回目から3回目にかけては2週間ほど空いてしまったのですが、感覚が振り出しに戻ることはなく、回を重ねるごとに運転がスムーズになっていることが実感できました。こうして計5回述べ10時間の教習を受け、教官からも「まあここまで走れば大丈夫でしょう」というお墨付きをいただき、ペーパードライバーコース修了しました。

私の故郷は車社会で、都会からやって来た人曰く「運転が荒い」そうですが、インドネシアからやって来た私に言わせれば、皆さんとっても運転マナーが良いです。車社会ゆえに歩行者も自転車も少なく、また、インドネシアに比べるとバイクの数が少ないのも良い点です。

最近では右折や車線変更にもだいぶ慣れてきました。横列駐車も切り返しが多いのですが何とか出来るようになりました（でも手っ取り早く頭から入れてしまうことが多いです）。交通標識はパッと目で見て理解できるものが多いので助かります。分かり辛くて困るのは、路面の標示と、カーナビの言う「この先300mで右方向です」というやつ。黄色線（車線変更禁止）の場所で車線変更してしまったり、カーナビが示す距離より早く曲がり過ぎてしまったり、うっかり曲がり損ねてしまったり。そんなこんなを繰り返しながら、いつかインドネシアで運転することを目標に日々腕を磨いています。

余談ですが、今の車はブレーキを踏んで停車するとエンジンも止まり、ブレーキから足を離すと再びエンジンがかかるのですね。お財布にも環境にもやさしいエコ機能だそうで、いざ渋滞すればエンジン停止、再スタートの繰り返しになります。インドネシアからやって来た私は「そのうちエンストするのではないか？」と不安になってしまいましたが、日本の車屋さんによれば「心配無用」だそうです（笑）。

南洋真珠養殖 その4 (ビトン、マタブル編)

今泉 宏

ビトンという町へ初めて来たのはいつだっただろう。初めて来た時の記憶はまったくない。おそらく90年代後半だったと思う。それまで日本とイリアンジャヤ(現在西パプア)の経路はジャカルターウジュンパンダン―アンボン―ソロンだったのだが、バリーウジュンパンダン―マナド―ソロンという経路でイリアンジャヤへ入ることができるようになった。多分その頃ビトンに採苗場があったこともありマナド経由でソロンへ行っていたと思う。

しかしその頃の記憶がほとんど無いのは夜遊びに連れて行ってもらったことが無かったからだろうか(笑)?その後2000年か2001年頃イリアンジャヤ常駐から解放されて拠点ビトンへ移すことになった。そこからの記憶はかなりはっきりしている。理由は多分よく夜遊びに連れて行ってもらったからだ。夜遊び隊長のM君を始めUさんにはよく遊んでもらった。

その時のビトンのイメージはさびれた港町という感じだ。これにしても判断基準はバーやディスコが何件あるかとかどれだけ盛り上がっているかという低レベルのものだがイリアンジャヤのソロンはこの手の店がカンブンバルという地区一か所に集中してあり、その数も10件以上あって土曜の夜などは大いに盛り上がっていた。その点ビトンはその手の店が散らばっていてあまり大っぴらには大騒ぎをしていなかったように記憶している。

2000年頃ビトンへ拠点を移してはいたが、仕事をしていたのはビトンからずっと南へ下ったところにあるボラアンモゴンドウ(ボルモン)という地区のマタブル村である。ビトンからコタモバグ市を経由してひどい山道をクネクネ走り最後は舗装もしていない雨が降ったら走行不可能な道をガッタンゴットンと通り抜けやっと到着するひどい僻地であった。片道5、6時間はかかったように記憶している。陸続きなのにそんな不便な場所であったからビトンへ帰るのは2、3週間に1度ぐらいだった。

この村は集落が2か所に分かれておりマジョリティーはモスリムで隅っこにクリスチャンの集落があった。したがって現地スタッフもほとんどモスリムだった。一般的なモスリムのイメージは酒を飲まないとかポルノ禁止とか女性は肌を隠すとかだと思うが、ここの村人は酒は飲むし下ネタ大好きだし女性も開放的であちこちで男女間のトラブルが頻発していた。結婚式に招待された時、夜はディスコタイムになり若くてきれいな女性たちが私を引っ張り出して何度も踊らされたのはとても甘く懐かしい思い出である。

北スラウェシの海の民と言えばサングル人が有名でビトン周辺や今いるタリセ島、その他多くの島々など漁民の村は大抵サングル人と思っていたがボルモン方面まで行くと漁村でも別人種であった。見た感じはミナハサ人より少し濃い感じだろうか？色白な人も結構いたような気がする。中には浅黒く彫りの深い顔立ちの人もいて、聞くとアラブ系の血筋が混ざっているらしかった。どんな経緯でこんな僻地に住み着いているのかは知らないが宗教は違っても見た目や性格はミナハサ人と大差はなようであった。

酒も女も大好きなマタブルの村人ではあったがさすがに豚肉は食さなかった。犬肉などもつてのほかである。ある時会社の敷地内で豚肉のバーベキューをしていたら近所の人に苦情を言われた。酒と女には寛容だが豚には厳しかった。ただ、まかないの女性はクリスチャンだったのでたまにこっそり家から豚肉料理を持ってきてくれ大いに助かった。

マタブル村のような自然豊かな僻地に住んでいると新鮮な魚は毎日手に入るし時には五色エビやマングローブガニのような高級食材も手に入ることがある。山へ行けば野生動物も多くいてクリスチャンの集落ではイノシシが捕ればお裾分けがあった。一度村人が山の牛が捕れたといって肉を分けてくれたことがあったが今思えば山の牛と言ったらこの辺りだけに生息する絶滅危惧種の「アノア」だったのではないかと思う。罪なことをしてしまった。が、すでに肉になっていたのだからどうしようもない。ただ、殺して食べておいてこんな事言うのも気の毒だが野生動物は大抵肉が固かったり獣臭がきつかったりで美味しいとは言い難いものが多い。

この辺りは山もまだよい木が多く残っており高級な黒檀なども村人はちょくちょく切り倒して家や家具を作るのに使っていたようだ。本当は黒檀は林野庁が1本1本に番号を付け管理しているのだが、まだ見つかってないものもいくら残っていたらしい。しかし私がマタブルを去った2001年ぐらいに業者が入って木材を伐採していたので今はもう変わってしまったかもしれない。

昔のことを思い出しながら書いていたら懐かしく前置きが長くなってしまった。そろそろ本題に入ろう。

2000年から2001年ぐらいの間私はパルー方面の調査をしながら普段はマタブル漁場の手伝いをしていた。ここへ移動してきた当初は稚貝もそれほどパツとしなくて真珠養殖の方はもっと悪く、行き詰っているように感じられた。居候の私は主に筏を修理したり養殖籠を洗ったりという補佐的な仕事を担当していた。マタブルの漁場は湾口が広く北東へ開いていたので東側の外洋からつねにうねりが入ってきていてそのため筏はアンカーが切れたりブイが切れたりあちこち傷みが激しかった。筏は長年海水に浸かっているとホヤや海綿、カキ、海藻などがベタベタに付き掃除をするのは大変だ。特にきついのはクラゲの仲間のシロガヤに刺さ

れた時だ。見た目はフサフサの海藻のように見えるがこれに触れるとビリビリっと痛みがありその後猛烈なかゆみに襲われる。もう一つよくやられたのはホヤだ。引きちぎる時に飛び出す水が目に入ると2日ほど目の玉がザラザラしてもだえ苦しむ。

養殖籠の掃除は主に高圧噴霧器を使って汚れを洗い流す。たいていの養殖場は村から離れており籠洗いの時飛散する海水に苦情を言う人はいないが、マタブルの養殖場は村に隣接しており会社のすぐ隣の家から度々この事で苦情を言われた。挙句には高圧噴霧器の使用を止めるよう強く求められてしまった。私が来た時にはすでに籠を洗えない状態になっており、汚れ籠が山積みになっていた。これを何とかしようと村からきている従業員に苦情を言っている隣人と話し合うよう頼んでも埒が明かず、洗い場をビニールシートで囲ってこれで試してもよいかと自分が直接頼みに行ってみたら簡単にオッケーが出た。そして数日試した後効果はどうかこれも直接聞きに言ったら問題ないとのこと。あいつは変人だから絶対無理だと皆に言われたが最初からけんか腰でいったらそれは無理だろう。よく村との交渉などは日本人がでしゃばらない方がよいと先輩たちから教わっていたが何でもやってみないと分からないもんだとこの時強く学んだ。

北東からの大きなうねりは屋形での作業にも影響を与えた。当時は私も海の仕事は慣れていたもので船酔いなどしない自信があったが、何度か屋形の仕事で船酔いにもかかったし、突然の大きなうねりでつないであったボートが屋形に強くぶつかりボートから落水したこともあった。筏仕事で落水する人はしばしば見かけたが私自身は後にも先にもこの1回のみである。うねりが大きい仕事はしにくく、筏も破損が多く汚れきっていたが、修繕が進み筏がきれいになるにつれ稚貝の生存率も上がってきた。多分たまたまよい年にあたったということもあると思うが。もともと外洋の澄んだ海水が常に入ってきていて肉眼でもわかるほど水は澄んでいたのも稚貝の育成にはちょうど良い漁場だったのだと思う。その後稚貝の育成は次々と好結果を残し、他の漁場では10%も生き残ればよい方なのにここでは生存率40%、50%は当たり前であった。

しかし真珠の養殖の方は相変わらずで核を入れてもまともな真珠はほとんどできなかった。そこで真珠の生産は諦め、稚貝生産一本に絞ることになり、マタブルで稚貝を6~8cmぐらいまで育て、挿核漁場のあるソロンへ空輸をするという方法が始まった。

この方法によりマタブル支店はソロンの本店に対して大きく貢献をし、今まで会社のお荷物的な存在だったのが一躍マタブルあつてのソロンとまで言われるように成長した。調子に乗って車も新車のキジャンに買い替えた。そして新車でビトンやマナドの夜の街を荒らして回った。というのは少しオーバーだが調子に乗っていたのは確かだ。マタブルからマナドを通過してビトンへ帰るのだが、途中でグランプリホテルの地下のバーへ寄り生ビールで乾杯するのが習慣になっていた。あの頃のビールはほんとに美味かった。今ではあまり肉体労働もできなくなってしまったが当時はガンガン体を動かしていたのでビールも美味しいはずである。

マタブルからソロンへ稚貝を空輸するという方法は一定の成果を上げたが、多くの問題も抱えていた。当時はマナドーソロン間の飛行機便が安定せず今は無きメルパティ社のジェットが飛んでいる時は安定して輸送ができたが、一旦故障などで飛ばなくなるとウィングスのプロペラ飛行機にはカーゴを積んでもらえないため、ウジュンパンダン回りになったりして貝が衰弱してしまったことが何度もあった。無事に到着したとしても餌は豊富だが濁りがきつく環境の変化が大きすぎ死んでしまう貝も多くあった。

この漁場はその後数年間継続していたが安定しない輸送の問題や常に金銭を要求してくる村との軋轢、木材伐採による泥の流出などマイナス要因が重なり残念ながら閉鎖になってしまった。

私は幸運にも稚貝ができ始めて大きな成果を出している時期、つまり大いに調子に乗っていた時期にそのプチバブリーな雰囲気を感じ合わせていただいたのだ。その余韻を持ってこの後2002年からバリへと旅立ったのであるが、マタブルでの成功体験はその後の私の真珠養殖人生に大きな影響を与えたことは間違いない。

日本と日本人の七不思議 (3)

長崎 節夫

(ケニー君とデムシー君が技能実習生として日本に来てもうすぐ3年。来る3月には実習期限満了でインドネシアに帰国の予定です。二人が実習生として籍を置いている会社は茨城県水戸市にある中堅の建築会社で、ケニーくん、デムシー君のほかに4人、合計6人のインドネシアの若者がいます。滞在期限が3年と制限されている外国人技能実習生を毎年2名ずつ入れ替えて3年任期で回転していることになります。

彼らは会社に隣接した寮に、十数人の日本人従業員とともに住んでいます。寮には食堂やふる場はもちろん、テレビやカラオケをそなえたサロンもあって、夕方、作業現場から戻ると翌日の出勤まで外出することもなく過ごすことができます。

さて今日は2017年1月22日、日曜日。大相撲初場所千秋楽の日です。入寮者のほとんどは外出していますが、大相撲好きの面々がサロンのテレビで大相撲観戦です。インドネシア人はケニー、デムシーにスマトラ出身のヘンドラ君、日本人は青森県八戸出身の佐藤さん、高知県土佐清水出身の山田さん。めいめい缶ビールやコーヒーを片手に相撲観戦です。

取り組みは順調に進んで結びの一番を迎えました。横綱白鵬対大関稀勢の里。稀勢の里は昨日の時点(14日目)で13勝1敗、優勝を決めています。対する白鵬は調子が上がらず昨日までに11勝3敗。

時間いっぱい、両者ぶつかり合いました。白鵬が押し込んだと思った次の瞬間、土俵際で稀勢の里のすくい投げが決まってあっけなく勝負がつきました。

大関稀勢の里が14勝1敗で初優勝。これで横綱昇進をほぼ確実にしました。来る3月場所は第72代横綱稀勢の里が現れるでしょう。

佐藤 : これでひさしぶりに日本人横綱の誕生だな。

山田 : 何年ぶりだろうか。この前の横綱は若の花だっけ？

ヘンドラ : 若乃花です。

佐藤 : なんてお前が知っているんだ？

ヘンドラ : 「大相撲」という雑誌にのっていました。

取り組みが終了して、テレビは君が代斉唱のために起立する観客を映し出しています。それを見て山田さんがすこし気取って、皆に起立をうながします。

山田 : みなさん、起立してください。君が代斉唱です！

ケニー : (立ち上がりながら) この歌はまだ歌えません。

山田 : 歌えなくても歌っているふりをするんだ。

ケニー : ロパクですか。

山田 : そう。ロパクで、気持ちだけで歌えばいい。

日本人二人とスマトラ出身のヘンドラ君だけが歌って、デムシーとケニーは歌うふりしてごまかしました。

ケニー : ヘンドラはいつの間に覚えたんだ？

ヘンドラ : 山田さんに大相撲の歌だから覚えろとごまかされました。

山田 : しごいたわけではないけど、ヘンドラは大相撲が好きだから大相撲の歌をおぼえろ、とけしかけただけだ。そういえばおまん、今場所も星取り表をつけているだろ？

ヘンドラ : ハイ (と返事しながらソファの上の星取り表を取り上げて見せる)

デムシー : ヘンドラは毎日、夜のスポーツニュースを観ながら書き込んでいるよ。学校の宿題みたいだ。

佐藤 : ヘンドラはほんとに変わった男だな。

表彰式が始まりました。天皇賜杯、総理大臣賞、優勝力士インタビュー、また表彰式と続きます。

佐藤 : (スマホの画面をみせながら) いま検索したら、日本人の横綱昇進は19年前の3代目若の花が最後らしいよ。稀勢の里が昇進したら19年ぶりだ。19年前といえば俺がまだ小学校低学年の頃だ。

山田 : ほんま。日本の国技といいながら横綱はモンゴル人ばかりだ。日本人の相撲取りは何をしてたんだろう。

佐藤 : 日本人は生活が豊かになってハングリー精神がなくなったという人もいるが、モンゴル人は基礎体力も違うと思うね。白鵬なんか見ているとそう思うよ。

デムシー : 3年前に僕たちが日本に来たとき、優勝するのはいつも白鵬でした。最近、少し弱くなりました。

ケニー : 日本に来たころは、白鵬や日馬富士もみな日本人だと思っていました。顔つきが似ているし名前もみな日本の名前でしょう？テレビのインタビューでも日本語をぺらぺらしゃべっているし、ヘアースタイルも同じだし。

山田 : 日本人もモンゴル人も同じモンゴロイドというからね。中国人もそうだ。インドネシア人だってモンゴロイドの系統らしいがヘンドラはどうしてインド人みたいに色が黒いのかね。

佐藤 : ヘンドラは色黒でも相撲とか食べ物とか、好みが日本人と同じだからモンゴロイドの血が濃ゆいと思うよ。

山田 : そうかもね。

表彰式も手順通りすすんで時刻は6時、テレビの相撲中継は終了してニュースに切り替わります。

山田 : さあ、6時だ。きょうは我々だけでデムシーとケニーの送別会だ。すまんがヘンドラ君は酒の采を作ってくれ。冷蔵庫に適当な材料がはいっているだろう。

ヘンドラ : ハイ、わかりました。

ケニー : 私も手伝います。

佐藤 : ケニーとデムシーは今日の主役だからそこでゆっくりしてくれ。俺がさしみをこしらえてやろう。

ということで、食堂のテーブルに小宴の用意ができあがりしました。ヘンドラ君のエビフライ、佐藤さん得意のさしみ盛り合わせ、あぶったするめいか、ビールにワンカップ大関がならびます。

山田 : さあ、まずはビールで乾杯といこうぜ。ケニー君、デムシー君、三年間よくがんばりました。インドネシアに帰っても元気ですごせるように乾杯！

一同 : カンパイ！

佐藤 : 早いものだな、この前来たばかりと思っていたら3年も経ったのか。

デムシー : ホントに早かったです。仕事にも慣れてきたと思ったらもう終わりです。

山田 : ホンマ、慣れたと思ったら満期除隊になって。

デムシー : マンキジョタイって何ですか？

山田 : 契約期間が終わったからインドネシアに帰りなさい、ということだ。

ケニー : 山田さん、マンキジョタイにならない方法を教えてください。

山田 : そんなこと、オレに聞かれてもわからないよ。
安倍総理大臣に聞いてください。

佐藤 : 安倍さんでも返事のしようがないと思うよ。しかし、実習生がようやく仕事を覚えてきたと思ったら満期除隊、というのは会社としてももったいないよな。

山田 : 今の制度がそんなものなら仕方がないな。
今回はとりあえずインドネシアに帰って、また戻ってこれる方法を考えたらよか。それより、今日はせっかくだからお二人に日本でこの三年間で何が一番印象にのこったか、会社でも会社以外のことで何でもいいですから、思ったことを話してもらいましょう。
ケニー君からどうぞ。

ケニー : テレビのインタビューみたいですね。
日本にきて考えたことはいっぱいありますが、そのうちの一つは、日本人は忙しいということです。仕事もいそがしい、歩くときも急いで歩く。日本にきて最初におどろいたことは、道端でぶらぶらしている人がいないことでした。

佐藤 : インドネシアではぶらぶらしている人が多いのかね。

ケニー : はい、仕事がなく道端でたばこを吸っているひとがいるし、仕事をしている人もゆっくりしています。道をあらく人もいそぎません。
たぶん、時計の針もゆっくり動いています。

佐藤 : 車もゆっくり走るのかね？

ケニー : 車はめっちゃとばします。ゆっくり走るひともいますが。

デムシー : インドネシアのドライバーはマナーが悪いです。スピード制限もない、交差点の一時停止もしない、酒気運転もかまわない。

山田 : それで事故はおきないのかね。

デムシー : 事故は多いです。

山田 : かわいいなあ。
おまんらもインドネシアに帰ったら交通事故に気をつけなさいよ。
ハイ、次はデムシー君。日本にきてどんなことが印象にのこりましたか。

デムシー : 僕もケニーとおなじように日本人は忙しい人種と感じました。
もう一つ別のことを話します。日本ではおいしい食べ物がいっぱいあって、
種類も多いと思います。寮のおばさんが作ってくれる食事だけでも
どれだけあるでしょうか、数えきれません。インドネシアで普通に
食べるものは、10本の指でかぞえられる程度です。

佐藤 : ヘンドラ君のスマトラも同じかね。

ヘンドラ : 僕はスマトラのパダンですが、パダンの食べ物は5本の指で間に合
います。毎日同じものだけたべています。

佐藤 : また大げさな！

デムシー : 日本で食べ物の種類が多いのは、春夏秋冬季節がうつりかわるせいも
あると思います。野菜も果物も季節でかわるし、夏は冷たいたべもの、
冬は鍋ものなど温まるたべものがいっぱいある。できたら日本で仕事をつ
づけて、ときどきお父さんやお母さんを日本に呼んで、すき焼きとか
お寿司をいっぱい食べさせてあげたい。ケニーもそう思うだろ？

(ケニー、うなづく)

山田 : 元気でいたらそのうちまた日本で働けるチャンスがくるから。

デムシー : 働くということで思い出しましたが、山田さんも佐藤さんもほかの
日本人の先輩たちも、仕事中でも仕事以外にも何でもおしえてくれます。
叱られることもあるけれど、それも教えてくれていることだとわかります。
ほかのインドネシア人研修生の職場でも同じだと聞いています。
インドネシアではそのようなことはありません。
仕事仲間でも仕事のことを教えたりしません。

ヘンドラ : 仕事だけではありません。きょうも佐藤さんからさしみの盛り付けを
教えてもらいました。山田さんは相撲のことも教えてくれます。
なんでも教えてくれます。

山田 : そう言われてみれば君たちにはいろいろ教えたな。いいことも悪いことも。

ケニー : 女性の口説き方だけまだ教えてもらっていません。

山田 : それは俺も苦手だからな。だからこうしていまだにチョンガーで、おまんらと酒をのんでいる。インドネシアにすてきな女性がいっぱいいるそうだが、俺の嫁さんは君たちがみつけてください。

ケニー : ダメダメ、インドネシアの女性はだめですよ。特にスラウェシの女性はダメ。

デムシー : 僕の実家はランゴワンで精米所をやっていますが、ときどき日本人が二人、米を買いにきます。ビトゥンという町に住んでいて、一人は真珠養殖をやっているそうです。二人ともミナハサ人の奥さんと子供もいますが、よほど日本の女性にもてなかつたんですね。

ケニー : 物好きな日本人もいるということでしょう。

山田 : 俺もものずきな日本人だから、ぜひスラウェシの女性を紹介してください。

デムシー : (ケニーと顔を見合わせ) どうしよう？

(完)

編集後記

今号は編集担当者の都合によって発行が大幅に遅れています。おわび申し上げます。とりあえず電子版を先行させて、製本版は担当者がインドネシアに戻り次第発行、ということにいたします。

平成 29 年新年号の巻頭は特別な用意もなかったので他人のフンドシを借りることにしました。俳優・加藤大介さんの名作「南海の芝居に雪が降る（改題・南の島に雪が降る）」です。半世紀前に映画館の看板を見て、題名だけは頭の片隅にのこっていました。今回、偶然にピトゥンの片隅で映画の原作となった作品に遭遇して、これは会員諸兄にも一読の価値があると即断いたしました。

それにしても大岩さんには、ご本人はタルシウス向けの原稿は執筆しないながらも、私たちに一読の価値がある作品・資料を次々と提供していただいています。大岩家の奥の部屋にまだ何があるか存じませんが、いつまでもお元気で貴重な資料を提供していただけるよう期待しています。

大貫さんから大変ユニークなレポートをいただきました。江田さん、今泉会長、中村さん、それぞれ現地在住者にしかできない貴重なレポートです。一時帰国中の下村さんは久しぶりに日本の寒い冬を堪能しているようです。たぶん、スラウエシに戻るまでにもう一本、原稿を送る機会があると思います。

次号は 7 月発行の予定です。森さんご夫妻、辛島さんも期待しています。賛助会員の皆様にもそろそろ応援をいただきたいと思います。

(長崎)